

詩篇 87 篇

0 コラの子たちの賛歌。歌

《シオンの都を愛される神》

- 1 主は聖なる山に基を置かれる。
- 2 【主】は、ヤコブのすべての住まいにまさって、シオンのもろもろの門を愛される。
- 3 神の都よ。あなたについては、すばらしいことが語られている。セラ

《諸国に注がれる恵み》

- 4 「わたしはラハブとバビロンをわたしを知っている者の数に入れよう。
見よ。ペリシテとツロ、それにクシュともに。これらをもここで生まれた者として。」
- 5 しかし、シオンについては、こう言われる。「だれもかれもが、ここで生まれた」と。
こうして、いと高き方ご自身がシオンを堅くお建てになる。
- 6 【主】が国々の民を登録されるとき、「この民はここで生まれた」とじるされる。セラ

《喜びの都》

- 7 踊りながら歌う者は、「私の泉はことごとく、あなたにある」と言おう。

「コラの子たちの賛歌」は次篇まで続きます。本篇全体に響き渡るのは、シオンの都すなわちエルサレムを愛する詩人の想いです。いえ、むしろエルサレムを愛しておられる神の想いと一つになっていると言ったほうがよいでしょう。個人差はあれ、誰も生まれ故郷を胸に秘めているものです。自分の人生の原点であり、帰っていくべき場所、心の拠り所のようなものなのかもしれません。この詩人にとっても、エルサレムは恋い慕うべき地でした。

詩篇 87 篇がいつの時代に書かれたかは諸説ありますが、1 節に出てくる「**聖なる山に基を置かれる**」という表現から、シオンの山に建てられたエルサレム神殿の存在が浮かび上がってきます。おそらく、これほどの郷土愛が表現されるところには、土地を追われた人が辺境の地で故郷を懐かしんでいるか、戻って来られたことの喜びを表しているといえることができるでしょう。よって、バビロン捕囚の直中か、捕囚から帰還した人によるものと言えそうです。

2 節に「**ヤコブのすべての住まい**」という表現が出てきますが、これはイスラエル十二部族全体を表しているでしょう。北王国諸部族を含めても、やはり中心はエルサレムであると言われていくようです。神はシオンを（つまり、イスラエル全体を）愛しておられる。シオンは「神の御座」であり（エレミヤ 3:17）、神の地上の住まいだからです。ただ、旧約においてはこのように特定の地が「聖地」として讃えられていましたが、新約の時代になるとものの見方が一変します。パウロは「あなたがたは神の神殿であり、神の御霊があなたがたに宿っておられることを知らないのです

か」(I コリント 3:16) と述べ、キリストを信じる者一人ひとりが神の住まいだと教えています。

さて、4 節には諸外国の名称が立て続けに登場します。まずは概して、通常イスラエルの敵と見なされる国々が神の民に加えられる情景が歌われていることを認識しましょう。その上で、国名を解説してまいります。

- ・ **ラハブ**…海の混沌の勢力を表す怪物だが、ここではエジプトを指している (イザヤ 30:7)
- ・ **バビロン**…南ユダ王国を滅ぼした北方の大国
- ・ **ペリシテ**…ユダ西部の地中海沿岸の平野に住み、ダビデ以前よりイスラエルと争ってきた
- ・ **ツロ**…イスラエル北方の地中海沿岸のフェニキヤ人の中心地 (ティルス)
- ・ **クシュ**…イスラエル南部、現在のエチオピアとスーダンの一部を含むエジプト南部の地方

これらの地名は異邦諸国の代表として挙げられたにすぎず、詩人の念頭にはおそらくもっと多くの国々が想定されているでしょう。視野をうんと広げれば、私たちの住む日本にまでも及んできます。「わたしを知っている者の数に入れよう」(4 節)、「これらをもここで生まれた者として」(4 節)と言われているように、ヤハウェなる神とは無縁に生きていた者がその恵みの内に入れられる日が来ることが予告されているのです。

ところが、それでもやはりイスラエルは生粋の神の民であり、救済史における神の取り扱いとは異なるようです。「シオンについては、こう言われる。『だれもかれもが、ここで生まれた』」(5 節)と言われているように、神の民としての「血筋」は特別な意味を持っているのです。パウロはローマ 9～11 章において、その選びの民がキリストを否んでいることを深く憂えており、恵みが異邦人に向けられると語っています。しかし、同時にこうも言っています。「**イスラエル人の一部がかたくなになったのは異邦人の完成のなる時までであり、こうして、イスラエルはみな救われる、ということです**」

(ローマ 11:25-26)。ここでは、神はキリストを信じないユダヤ人の心を、異邦人が次々に救われていく現実を示すことによって造り変え、ついにはユダヤ人も異邦人も共にキリストを信じる日が訪れると約束しているのです。選びの民の重要性がどういう形で明らかになるかは分かりませんが、イスラエルがイスラエルたる意味は損なわれることはないでしょう。しかし、異邦の民もキリストに接木されることによって神の民に加えられる(登録/7 節)のです。「もしあなたが、野生種であるオリーブの木から切り取られ、もとの性質に反して、栽培されたオリーブの木につがれたのであれば、これらの栽培種のものは、もっとたやすく自分の台木につがれるはずです」(ローマ 11:24)。

本篇は「踊りながら歌う者は、『私の泉はことごとく、あなたにある』と言おう」(7 節)という、信じるすべての人が一つとなって賛美の歌声を上げる情景をもって締め括られます。これは、世界各国に散らばっている神の民の集合体です。神は諸国に「残りの者」を存続させ、ご自身の宣教の働きが途切れないようにしておられます。それらの民がキリストの許に集められ、もはやユダヤ人もギリシャ人もなく共に賛美をする日が来るというのです。いえ、地上の教会でささげられる賛美は「終末的な賛美」であり、かの日とのつながりを持っていると言えましょう。主イエスが与えてくださる「永遠のいのちへの水」(ヨハネ 4:14)を飲む者の愛の交わりを心から大切にしていきたい、そう思われる一篇でした。